

## ○令和2年度国立大雪青少年交流の家教育事業

### 「災害サバイバルキャンプ」(R3.2.27(土)、R3.3.6(土))

令和2年度国立大雪青少年交流の家教育事業

# 災害サバイバルキャンプ

One-day survival camps



期日 ①令和3年2月27日(土)【日帰り】  
②令和3年3月6日(土)【日帰り】

対象 小学校5・6年生

定員 各日20名(先着順)

※①、②より期日を選択の上お申し込みください。  
※①、②とも同様の内容で実施します。

#### ◆目的

北海道における冬季の災害避難所模擬体験を通じて、災害時を想定した場面で適切な行動を考えることのできる学習機会の提供を図る。

#### ◆参加実績(募集定員:各日程20名程度)

参加:2月27日(土) 9名  
3月6日(土) 16名

#### 【地域別内訳】

旭川市 13名  
富良野市 2名  
上川郡 7名  
空知郡 3名

#### 【参加者構成・性別】

男14名・女11名

#### 【参加者構成・学年】

6年生12名・5年生13名



#### ◆プログラム

##### ① ガイダンス…(60分)

事業の狙いを伝え、グループ分け発表⇒個人⇒アイスブレイクなどを通してグループで課題解決に挑むための関係を構築することができた。

##### ② 避難所運営ゲーム…(90分)

北海道版避難所運営ゲーム(DOはぐ)を基に、小学校高学年向けに条件設定などを精査した内容で実施した。カードに書かれた避難家族を次々に振り分け、体育館を避難所とした図面へ配置した。途中、イベントを起し各グループで対応策を話し合っていた。実際の避難所設営に向けての課題意識を喚起することができた。活発な意見交換や新たな視点の気づきが見られた。

##### ③ 避難所生活を学ぶ…(120分)

###### ○模擬避難所の設営(班・グループ毎)

避難所運営ゲームで取り扱ったモデル家族を取り上げ、その家族の困り感に合う避難スペースを設営した。各班では、役割分担を決めて分業することで要領よくスペースを作成する姿が見られた。

○模擬避難所設営の途中で備えがあると便利なものを支給しながら、避難所生活を体験させた。各班では、支給された物品を創意工夫して利便性を引き出し寒さ対策などに活用する場面が見られた。



#### ④ 振り返り… (30分)

避難所運営ゲーム、避難所生活体験（模擬避難所設営など）を通じた感想と今後取り組んでいきたいことを付箋に記入して、カテゴリー毎に分類した。班毎に気づきや学びを共有することで今後への意欲づけとすることができた。



#### ◆事業運営・企画のポイント

- コロナ禍の影響で当初予定していた7泊8日の長期キャンプに比べて規模を縮小した上での実施となり、募集期間・実施時期も当初予定より延期することになったが、体験活動を盛り込んだ内容を企画できた。
- 参加対象を小学校5～6年生としたことで、運営者側としてはプログラムの進行が円滑に行うことができた。
- 冬期間実施で、被災時の寒さ対策や電気が無い設定での作業などよりリアルな体験を提供することができた。
- 北海道教育大学岩見沢校野外教育学研究室の山田准教授の協力を受けて、自然体験や生活体験を防災教育に活用する視点で企画を遂行することができた。

#### ◆参加者の声

- ・キャンプで知り合った人と楽しく体験や勉強ができてとても楽しかった。
- ・電気、電力の大切さがよくわかった。
- ・災害について改めて考えられた、今回参加していない人たちにも参加を薦めたい。
- ・避難所運営ゲームに登場した家族を例に、模擬避難所設営ができて面白かった。
- ・避難所生活はとても大変そうだと感じた。
- ・作った模擬避難所でもっと長く過ごしてみたかった。

#### ◆事業の成果と課題

- ①参加者同士、面識のない者同士でも一体感をもって行動することで円滑に協力体制が取れた。
- ②避難所運営ゲーム（DOはぐ）を小学校高学年向けに改編して実施したことで、参加者が理解しやすく全員で思案、討議して進めることができた。
- ③電気無し、暖房無しの環境を設定し、その中で模擬避難所設営や支援物資体験などを行うことで、より実際の場面を想定した模擬体験となった。
- ④北海道教育大学岩見沢校野外教育学研究室の山田准教授の監修を受けて、今回事業を基に防災教育の普及啓発資料としてリーフレットを作成し、小学校や青少年教育施設に向けて広報をすることができた。

◆事業運営費 合計	325,105 円
旅費	21,880 円
消耗品費	285,888 円
郵送料	9,216 円
印刷費	14,322 円
燃料費	1,024 円